

第10回(2009. 2. 26 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「3月は雛祭り」

3月3日は「雛祭り」である。「桃の節句」ともいい、雛人形を飾り、菱餅や白酒をいただくしきたりが今に残っている。現在では女の子のお祭りとしているが、そもそもは「上巳の節句(じょうしのせつく)」といい、季節の変わり目に病気や災害から身を守るため、平安時代から薬草や薬膳などで邪気を避け、悪魔を祓ったという五節句(節供)の一つである。『日本書紀』には、上巳の節句は3月3日となっているが、古代中国では3月の最初の巳(み)の日を「上巳の日」といって、汚れを祓い浄める日と定めていた。これがいつの頃からか3月3日になったものである。

もともと、わが国には「雛人形あそび」があった。『源氏物語』や『枕草子』にも登場するから、日本古来の伝統的な遊びである。他方、古くから身を清めるための禊ぎとか祓いには、天児(あまがつ)と這子(ほうこ)という人形(ひとがた)を草本や紙で作し、不浄を人形に託して川に流す風習があった。こういったことから、3月3日の上巳の日には、天児と這子という人形と雛人形あそびとが一緒になって、いつしか幼い子供の厄払いと成長を願うようになったと思われる。江戸時代になり、平安時代の宮廷を模して雛壇を造りお雛さまを飾ることが流行し、雛祭りに発展した。

雛壇飾りは、一般的には15人飾りで、内裏雛(天皇、皇后)2人、官女3人、囃子5人、隨身(左大臣、右大臣)2人、仕丁(衛士:泣き、笑い、怒り)3人の合計15人、これに道具を加えて7段飾りが決まりものである。本来、雛飾りは男雛と女雛とその家来たちだったが、唱歌『うれしいひなまつり』から男雛を内裏雛(内裏 = 天皇の私的な住居)というようになった。そこから内裏雛は天皇、女雛は皇后、隨身は左大臣、右大臣だといわれるようになった。もともとは男雛だけだったが、江戸時代になってだんだんと華美になってきて、現在の15人7段が標準になった。近年は見栄を張る人が多くなったから、人形店の戦略に乗せられて、標準飾りの5人の囃子を7人にしたり、道具を追加するなどして、さらに豪華になっている。今では決まりものでさえ非常に高価なものになってきた。娘が嫁に行き女の子を産めば、雛飾りを贈るという風習が残っている地方も多いが、困ったことにわが家には二人の娘がいる。娘たちが女の子を産めば、この雲竹齋は破産する。だから、戦前の天皇中心の政治が否定された現在、この風習はよくないのだとか、まだ赤ん坊には意味がわからないから、などと説得を試みている。

雛飾りには決まりがあって、最上段に男雛、女雛の2体、次の段は3人官女、以下5人囃子、隨身2体、仕丁3人の順に飾るのが標準飾りだが、地方によって男雛、女雛の飾り方が若干違っている。京都など古い土地柄では向かって右が男雛だが、一般的には向かって左が男雛である。もともとは京都方式だったが、昭和天皇の即位式(1928.11.10)の際の天皇の位置になって、向かって左に男雛を飾るようになった。これは、昔の習慣が左優先だったのが近年になって右優先の社会になったのが理由だろう。そのほか隨身2体は老人(左大臣 = さだいじん)が向かって右、若い方(右大臣 = うだいじん)が向かって左なのは変わらないようである。左大臣と右大臣は、日本の律令制における太政官(たじょうかん = 国家最高機関)の官職である。位は右大臣より左大臣の方が高かった。この上に太政大臣がいるが太政大臣は常時置かれたわけではなく、左右大臣は事実上の最高位であった。

『古事記』や『日本書紀』(あわせて『記紀』という)によれば、イザナキノミコト(伊弉那岐命/伊弉諾尊)の左目から第一子アマテラスオオミカミ(天照大御神/天照大神)が生まれたとされているように、左の方が右より上席などというのは、古代中国の影響からきた習慣だと思われる。「陰陽五行

説」から左が陽で右が陰としているからという説もあるが、確かなところは不明である。一説によれば、上位の者すなわち天皇や左大臣が左側に位置するのは、陽が昇る東の方が、陽の沈む西より上位だからだともいわれている。ダルマを買ってきて片目を入れて、念願が成就した時に、あるいは一年が無事に過ごせた時は、両目を入れて神社に奉納するが、最初に入れる目が向かって右、すなわち左目であるということも同じ理由だという。

また、道具で間違いやすいのは「橘」と「桜」の木の位置だが、向かって右が桜である。京都御所の紫宸殿の庭には、建物に向かって左手に橘の木、右手に桜の木が植えられている。これらの木は「右近(うこん)の橘、左近(さこん)の桜」と呼ばれている。橘と桜は、どちらが右だったか左だったか混乱している人や、「右近の桜」と記憶している人も多く、なかには「ウコンザクラ」という淡い鬱金色をした花を咲かせる桜を「右近の桜」だと思いこんでいる人もいる。また「右近の橘だから、建物に向かって右にあるのが橘だろう」という人がいる。紫宸殿は南を向いている。古くは天皇が政務を行った場所だったが、天皇は庭に向かって座るから、天皇から見て右(西)に橘、左(東)に桜である。

紫宸殿の西の方に「右近衛府(うこのえふ)」の衛兵が警護していた。そこに橘の木が植えられていたから「右近の橘」と呼ばれた。その反対側に桜が植えられていたから、その桜は「右近」に対して「左近」の桜と呼んだといわれている。なぜ橘と桜が植えられたのかは不明である。『記紀』によれば、垂仁天皇が多遲摩毛理(田道間守)に命じて、「ときじくのかぐのこのみ」を取ってくるように命じたが、この実は不老不死の木の実だといわれており、一説によればこの木が橘ではないかといわれている。また、左近の桜は、もともとは「梅の木」が植えられていたが、その梅が何度も枯れたり焼けたりしたので、村上天皇(第62代天皇、在位946～967)が桜に植え替えたという。

なぜ桜が日本人に親しまれてきたかといえば、江戸時代の国学者である本居宣長(もとおりのりなが1730～1801)が、「敷島の大和心を人間はば、朝日に匂う山桜かな」と詠んだ歌に代表されるように、日本人の精神の象徴であるといわれ、また南北朝時代(1336～1392)の忠臣といわれた楠木正成(くすのきまさしげ生年不詳～1336)のように、天皇に忠誠を誓い桜の花のように美しく散るのが武士だということで、「花は桜木、人は武士」という言葉が江戸時代から太平洋戦争時まで教育の場でも教えられてきた。その結果、多くの人が太平洋戦争で爆弾を抱え、敵の艦隊や陣地に体当たりしていった悲しい歴史がある。こういう時代背景の下で、全国の兵舎や学校の庭に桜の木が植えられた。

雲竹斎先生は、田舎の親族を代表してパプアニューギニアで戦死した長兄の冥福を祈るため、桜が満開のころ靖国神社に詣でて、境内の桜を愛でることにしている。「靖国問題」が論議されていることはじゅうぶん承知しており、またこの是非を論ずるつもりはないが、戦死したら靖国神社に帰れる、という言葉信じて戦死していった兵士が多かったことも事実である。満開の桜の木の下で大酒を食らい、放歌高吟バカ踊りする者がいるが、祖父、親、兄弟、親戚などの尊い犠牲の上に、現在の自分が存在していることを忘れてはいけない。